山崎郷土研究会報

NO. 105
17.4.17

兵庫県宍粟市教育委員会
地域教育課内
山崎郷土研究会
電話62－2000

【地域史随想】

高貴の出自につながる人たち（一）

宇野　正碌

はじめに

平成十七年四月一日に宍粟郡の四町が、宍粟市をつくった。今後は一体となって進む共同体となった。合併記念として四町にかかわる本題を取り上げた。

一、森の中に足跡を残した人たち

中国山地の東部では氷ノ山（一五一四メートル）を主峰とする播但山地が続く。この山地は隆起準平原であって山頂は比較的平坦だが、谷は浸食を受けて深く、滝と急流が多い。中腹や谷底には針葉樹・広葉樹の森林が多い。

この播但山地を歩くと興味深い地名や伝承に出合う。伝承には椀貸しの話、森とか岩穴に向けて椀がかしてほしいといえば、翌朝には椀膳が必要な数だけ出してある、というものである。この話はさて置き地名のことであるが、奥・北播磨では「ロクロシ山」「木地山」「木地屋敷」「木地屋垣内」などがあって森に住みついた人のあとを残している。「ロクロシ山」は轆轤師山のこと、軸機を回して器物を作る工具、その工具を操作する人のことである。つまり「ロクロ谷」「木地屋敷」「木地屋垣内」とは住まいのあった場所をいっている。「木地屋敷」は多可郡加美町山寄上の西奥の三国岳（八五五メートル）の麓にある。ここを取り上げたのは同じ播磨北部でありながら多可郡では木地屋の伝承は珍しいからである。三国峠を経て朝来郡との往来が可能なので、

目　次

①【地域史随想】
高貴の出自につながる人たち（一）　宇野　正碌　1
②シルクロード紀行
～心のふるさと、はるかなシルクロード～
金谷鏡の源流を訪れて　片山　昭悟　8
③室町時代の領主と年貢　下村　哲三　13
④山崎町須佐沢　長井家に見る
高瀬舟関係資料の読み出し（一）　森本　一二　15
⑤農家の住宅と生活　谷井　伴夫　21
⑥山崎町歴史街道（九）　会報部　25
⑦事務局だより　27
⑧平成十七・十八年度役員　28

木地師は三国岳斜面の素材を求め移動して来たのであろう。

宍粟郡はさすがに木地師関係の地名は多い。「木地山」は千種町西河内、「轆轤師山」は一宮町公文、「木地屋垣内」は山崎町上ノ、「ロクロ谷」は波賀町野尻にある。探せばもっと出てくるだろう。地名ではなく記念物の類で見ると波賀町赤西国有林（旧名称）夏季事務所の前の川の対岸に石灯篭があって、「奉納　御神燈　安政六末（一八五九）当山木地師中」と刻んである。木地師個人の墓（菊紋入り）は多いが木地師仲間の記念物は珍しいのではなかろうか。但馬のことであるが、慶安元年（一六四八）には近江国の蛭ヶ谷に八幡神社が完成し、まだ鳥居のないことを知った但馬の木地師四郎右衛門、九右衛門、善五郎らが肝煎となって鳥居を献納したことに比べると播州の木地師の動きは小さかったかもしれないが、このような記念物を残したことは注目してよい。これとは別のことであるが明和二年（一七六五）の氏子狩のときは播州木地師四十九人が納金の義務を果たしているのは宍粟の木地師の団結を示す事柄である。

二、惟喬親王と小椋郷

話題をかえるが、突然に筒井八幡（蛭谷）氏子狩、などの言葉が説明もなく飛び出したので説明すると、伝承では五十五代文徳天皇の第一皇子の惟喬（これたか）親王は弟、清和天皇の母が藤原家の出であることから弟に立太子を先きんじられたため、小椋太政大臣や堀川中納言らをともなって近江小椋郷に隠棲、ここで轆轤の技術を教えられたという。それで木地師達は木地の祖と仰いでいる。蛭ヶ谷には祖神を祭る八幡神社がある。近江では同職が多くなると良材を求めて諸国に分散して行った。このためには同郷の縁者、親戚を頼って行く事もあり、現地で互いに援助協力が必要であり実際に団結心は強かった。神崎郡神崎町福畑の大歳神社の「神社調書」によると、神社北側の山頂（旧高野山）付近に昔、何れの時にか五人の高貴の落ち人来り仮小屋を作って住居し、甚だ尊敬せられた。彼の貴人たちは五段階に沿って居を構えていた。この五人の貴人を祭ったのが五社稲荷という、とあるが五人の貴人は近江から来た木地師かと思われる。常に出身地小椋郷、小椋姓を忘れず高貴の人とゆかりのある自分たちを誇りにしていた。話ははずれるが（シクラメンの薫り）で名高い小椋桂氏はペンネームか本名かはしらないが無縁ではなさそうだ。諸国に分散して行った木地師たちは郷里の神社や寺院に対しては愛郷心と信仰心から彼等自身の発意から出ていて団結の強さと経済力の大きさを示すものである。神社側も経営維持のため諸国分散の木地師たちの所を巡回して志納を求めた。昭和三十年調査では宍粟郡内では一宮町小原に二十軒、同溝谷に十軒、同阿舎利に三軒、あと一宮町千町、上岸田、波賀町道谷、戸倉、鹿伏、原、野尻、山崎町上ノ、千草町などに一軒あった。

次表（図1）は近世の氏子狩帳の記載の人数を先学の研究に基づいて作成した。

宍粟郡木地師居住地（水系別・地区別）一覧表

○印は人数員不明

水系	地名＼和年号（西暦）	正保四（一六四七）	明暦三（一六五七）	寛文五（一六六五）	同十（一六七〇）	延宝七（一六七九）	貞享四（一六八七）	元禄七（一六九四）	宝永四（一七〇七）	正徳一（一七一一）	享保五（一七二〇）	同十二（一七二二）	同二十（一七三五）	元文一（一七三六）	同四（一七三九）	寛延二（一七四九）	同四（一七五一）	宝暦六（一七五六）	同十四（一七六四）	明和二（一七六五）	天明九カ（一七八九）	寛政五（一七九三）	文政十（一八二七）	天保六（一八三六）	弘化三（一八四六）
引原川	留谷				17																				
	そだ谷													23											
	応元山										8														
	下山木地			9																					
	優良山													7					若杉山1						
	津田含み													5											
	柿谷（滝谷カ）			○																					
	原		176																						
	宮中	○																			14				
	鹿伏																8				11		8		
	石亀	○									5								2		16				
	はたな志																								
	戸倉		48								8				16		10		3						
	引原（挽原）								16・13・5		18	8											14		
	奥のかうらい								23										1						
	日ノ原			4				70	15								27				9			12	
	音水	○	○																						
	赤西	○			5																				
	かんかけ																								6
	西谷木地				16									水谷山3											
三方川	味方木地	○	28	3	6			70												播州木地師総中49人					
	三方東山																						樫木25		
	三方根東山																							42	
	三方公文																		1					21	
	小原				1				28												18				
	溝谷																						3		
	双四軒								30																
	柳山三軒										34														
	阿舎利													15							10		7		
	三方黒原													4											
	草木													25											倉床6
	はりま銅山留谷																		3				5		
不明	はりま播磨国																		3						
	はりま（山）屋													3											
	はりま池水											18													
	かきあげ				6																				
河内川	東河内	○																			9				
	西河内	○																			3				
	みむろ	○	○	8																					
	とくさ（ちくさ）		○																						

図表１　杉本寿　橋本鉄男　藤本浩一氏の研究書に拠る

氏子狩の役員が巡回した道筋を辿ってみると、宝暦十四（一七六四）年三月から五月前半まで但馬朝来郡から養父郡を経て三方公文→波賀石亀→戸倉から但馬に巡回している。（表1）訪問先で聞き取りと時には道案内も依頼したと思えるが、一所に定住しない人を山中で見つけることは至難のことであったろう。但馬方面からの宝暦十四年三月、五月の巡回は次の表のようであった。

氏子狩巡回経路　（表1）

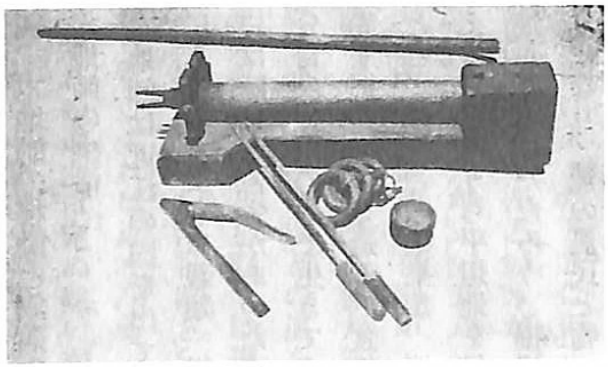
		巡回地名	人数
宝暦十四年	三月		
同	三月二日	但州朝来郡た中山木地屋	4
〃	二日	但州朝来郡御子祖山	2
〃		但州朝来郡御子祖山	
〃	三日	但州養父郡大屋あけのべ山	2
〃	四日	但州養父郡大屋あけのべ山	1
〃	五日	但州養父郡たぶち山	2
〃	六日	但州養父郡筏村さじみ山	1
〃	八日	はりま　銅山　木地屋	3
〃	九日	はりま国	3
〃	十一日	はりま国公文山	1
〃	〃	はりま国若杉山	1
〃	十二日	はりま国宍粟郡石亀木地屋	2
〃	〃	はりま　戸倉山はの木谷山	3
〃	十三日	はりま　戸倉山はの木谷山	2
〃	〃	はりま　こうらい山	1
〃	十五日	但馬　横行　とうごし山	1
宝暦十五年五月	一日	石原山木地屋	3
〃	二日	作山	2
〃	三日	金山木地屋	2
〃	五日	但州　朴恵（けび）山	2
〃	〃	但州竹野久口谷	1
〃	六日	但州ひつみ郡山田山木地屋	2
〃	七日	但州かつら谷	1
〃	〃	但州大照山木地屋	3
〃	八日	但州三方郡朴息山	2
〃	〃	但州三方郡留田山木地屋	2
〃	九日	但州三方郡三方山木地屋	
〃	五月十日	因州八東郡諸鹿山木地屋	10
〃	十一日	因州八東郡内村山木地屋	4

三、木地製品の製作過程

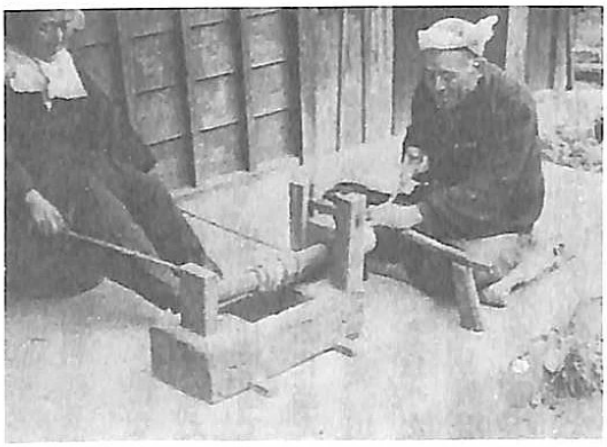
木地師たちが求めている木は栗・欅（ケヤキ）・朴（ホウ）・栃（トチ）・山毛欅（ブナ）・桜（サクラ）などで、木地製品は轆轤をつかった丸いもの椀・盆類と杓子類にわかれる。轆轤を使う職人は「ヨコキジ師」使用しない方は「タテキジ師」といった。素材には伐採の時期があって夏の終わりから秋の彼岸ころに切り倒し、秋の終わりころには一箇所に集めてよく乾燥する。木を切り倒してすぐに製品を作る訳ではない。よく乾燥するには日数がかかる。乾燥ができると目的の大きさに切って小屋にもちかえる。伐採から小屋に持ちかえるまでは主として男の仕事、小屋で型に合わせるなどは女がする。轆轤仕事は二人でなければできない。杓子造りではヨコ木の素材は「シロ」といって現地での男の仕事で「シロコシラエ」という。木目に沿って削ぐ。小屋で「ホラツリ」「セン」などを使い仕上げる。これは主として女の仕事になる。轆轤を使う場合は男は現地で木を輪状に「玉切る」これを小屋に持ち帰る。小屋では規定の大きさまで周囲を削る。女の仕事。つぎは男女共同で轆轤かけの仕事となる。地面に杭を打って轆轤を固定し、軸を回すのは主として女、地面に腰を下ろし、両足で轆轤の横手を踏ん張り、軸に巻き付けている綱の両端を交互に引く。男はカンナ掛けをして削る。カンナを持つ手はあらかじめ固定した台に置いて支点を定めてカンナ掛けをする。直径の大きな鉢を作る時は地面を凹めて素材が回転しやすいようにする。外に新形式のものは古い足踏みミシンに似たものも考案されていて一人作業のものも出来ていた。

杓子造りの工程図

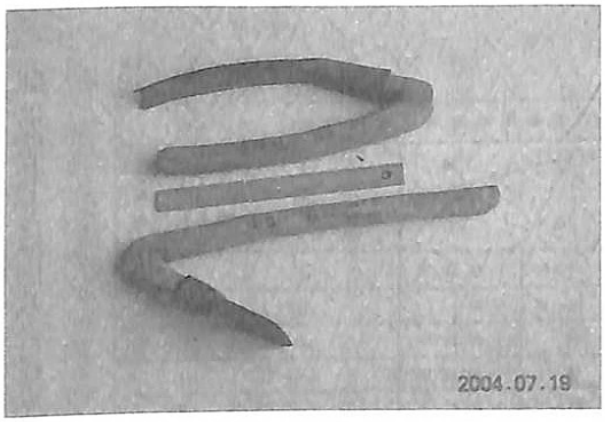
（一宮町黒原　小椋清吉老の仕事より）



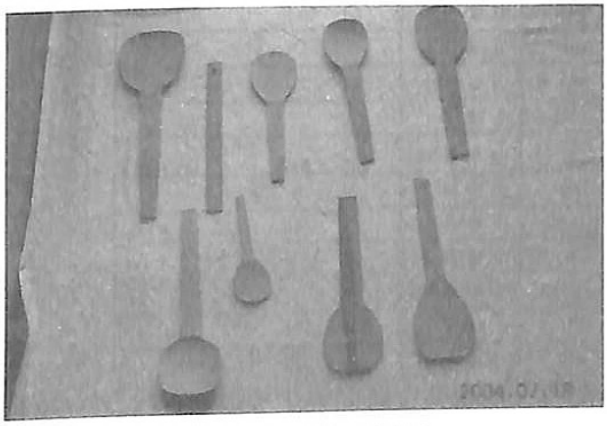
「木地師の習俗」より



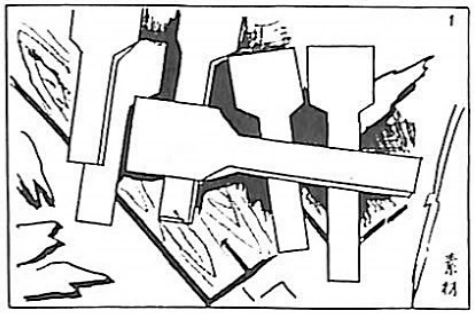
仝上



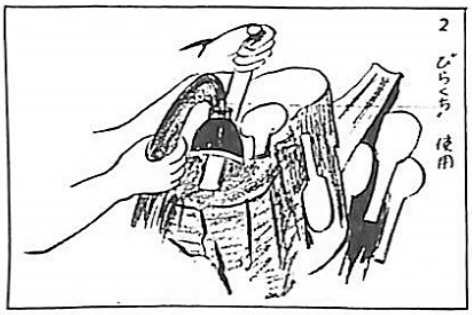
中切・平口（宍粟一宮町）



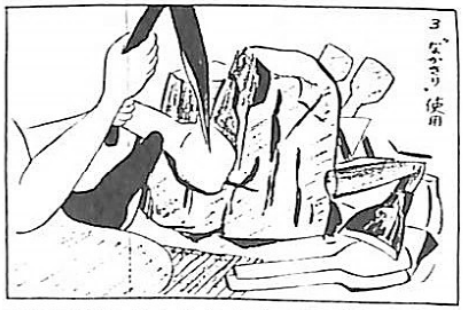
製作途中の杓子（宍粟一宮町）



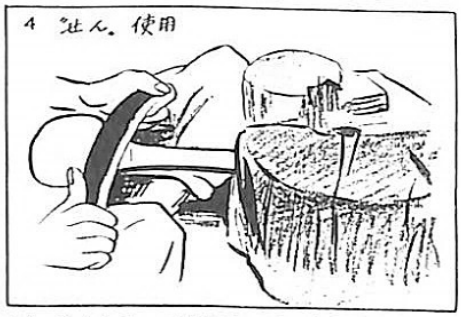
(1)原木を玉切って扁平に割ったものから作った素材（使用具…よき）



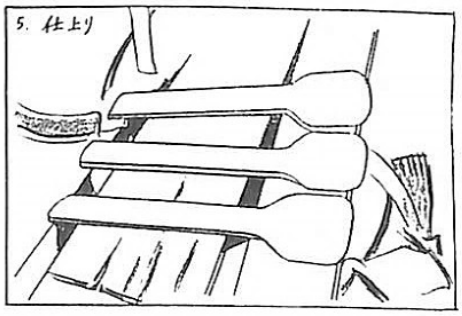
(2)素材を“ひらくち”で角を削って頭部に丸味を持たせる



(3)頭部を“なかきり”で凹味をつける。左足で素材を台に押しつけている



(4)“せん”で荒削りの部分を仕上げ更に“木賊”でみがく

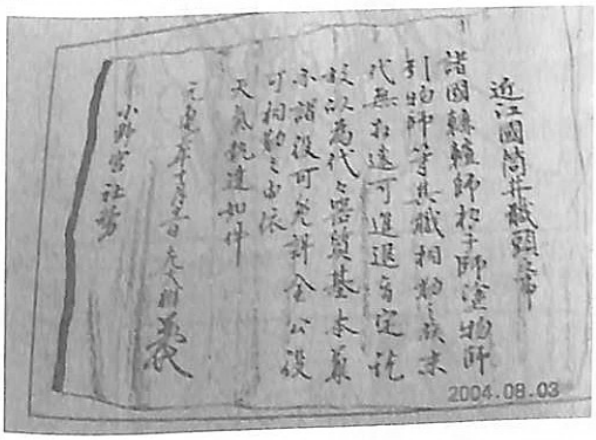


(1)～(5)のスケッチ　山崎高校「地理歴史」より

四、木地師の移動と集落の成立

木地師の生活

木地師は近江の国を出て各地の深山で仕事に就くことになる。前にも書いたように親類、縁者と連絡を取って仕事の適地をえらぶには随分と苦労があったことは想像できる。また、仕事場では自分自身で山の中で生きてゆかねばならない。生活するに当たって先ず掘建小屋を造る。食料は山菜、茸、ウド、たけのこ、山芋などと、栗などの堅果類、淡水魚、取りあえずなんでも食べたと考える。そのうち平坦地を見つけ野菜、麦、ソバ、ヒエと栽培種も進んでいっただろう。掘建小屋で持参した轆轤で木地が造れるようになり、麓の農民と物々交換が出来るようになるにはかなりの日数が必要であっただろう。多くの製品が造れ仲買人に届けて代金が受け取れれば生活は安定する。氏子狩の巡回使も来る。そこで自分が入っている山よりも樹木の多い山を紹介されると移動が始まる。中には家庭の事情で移動を余儀なくなれる人も居た。移動は身軽いといえば身軽い。轆轤などと食器類を担いで行けばよい。農民は土地を離れる訳にはいかないが、木地師は身軽い。



師は伝承では山八合目以上は自由にどんな木でも伐ることが出来るとして免許状をさずかって行動した。

実業都木地屋関係遺物表

町名	氏名	種別	木地屋関係古文書	其他道具	ロクロ	樹軸	免状	由緒書
波賀町	戸倉村	小椋時夫		○			○	○
	兜伏	平桑						○
	原	小椋繁治		○			○	○
	原	小椋虎治		○	神子			
	原	小椋仁市			旧式		○	○
	野尻	小椋角蔵		○				
一宮町	阿曽利	小椋仲蔵	○	○				
	〃	小椋為次			新式			
	溝谷	小椋多七	○			○		
	〃	小椋					○	
	小原	小椋清太郎	○	○				
	〃	小椋彌平			旧式			
	〃	小椋喜平次				○		
	黒原	小椋清吉		○	近年まであり大阪浮世大へ			
	上樋田	小椋亀太郎					○	○
	西公文	元庄屋	○					

山崎高校　地理歴史研究第７号より

近江の国筒井職頭事

諸国轆轤師杓子師塗物師引物師等其職相勤之族　末代無相違可進退旨定訖　故以為代々器質基本兼亦諸役可免許全公公役可相勤之由依

天気執達如件

元亀三年（一五七二）十月十一日

左大辨　在判兼　□□

小野宮社努

これを聞くと全く無税の天下ご免である。もっと古くはそんな時もあったかもしれないが、この文書も偽文書とされている上に実際に近世の資料を見ると、かなりの制約があった。

税といわないまでも氏子狩で木地師が納めたものも取りようではなんとでもとれる。居住地の支配者からは小物成が課せられた、宍粟郡に残る資料では木地轆轤役一ツニ付銀九匁ヅツ　但し木地師他領一参り候ハバ月割ニ成ル。また、宍粟郡都多村の史料では轆轤一挺ニ二十五匁の小物成（享保二年＝一七二七）が課せられている。ほかに移動した先の村とのつきあいがある。相手の村の農民が炭焼きしているとその差し支えにならぬよう伐木の木の種類の規制を守らねばならない。領主も松・杉などはきらせてはくれない。

つけ加えると山奥の地理にくわしい木地師は道案内にも起用された。

木下籐吉郎の但馬、因幡攻めについて木地師の活動が浮上する。但馬に入ったときは天正五年で竹田から生野まで猪野村次郎左衛門が先導したというが、このときは木地師とはっきり記してないが、天正九年（一五八一）のときは播磨の山中を木地師小椋次郎左衛門が道案内を勤めている。播磨から因幡に入ると吉川まで送り、吉川村庄屋小椋太郎兵衛が引き続いだといわれる。さて播磨を通過するにはどの道を通っているのだろう。姫路から北上し三方谷に入ると鳥取へは遠くなる。西谷道でも吉川宿とははずれる。三方谷から西谷にさらに千草への間道がある。千草谷から大通りをこえれば近くなる。

いずれの道かは定め難いが天正十一年（一五八三）に丹羽五郎左衛門から「諸役令免除之条、商売不可有異議者也」と免許されているのは播磨木地師と因幡木地師の活躍の賜物であった。また、ただ住所移転にも領主の承認が必要で有ったことは勿論、『鳥取藩の家老日記』によると、播（但）州二方郡水谷鉄山八蔵　母共に二人河村郡尼子木地屋へ永代引越し申度由、元禄六年五月十九日という記録。中津奥木地屋庄兵衛病気故、所ニ而ハ渡世難渋ニ候ニ付、但馬国二方郡岸田村木地屋、兄伝兵衛方江ニ其身一人永代ニ引継ギ申度旨、親方の日野屋安兵衛と申もの願いに付而、勝手次第ニ但州江引越候。とか作州勝田郡右手村木地挽、七兵衛、長郎兵衛、次郎兵衛、助市、吉兵衛妻子供二、三十人智頭郡奥早野へ永代引越申度旨……という例をみることがある。

ほかに農業が可能な平坦地を求めることにも目的があった。川見時蔵氏の家系調査資料にある貴左衛門家は但馬二方郡畑ヶ平（正保四年＝一六四七）同二方郡上山（明暦三年＝一六五七）→一度住んでいた二方郡畑ヶ平（寛文五年＝一六六五）→因州八頭郡細身木地屋（延宝六年＝一六七八）→但州岸田村花口（延宝七年＝一六七九）→気多郡三原山（貞享四年＝一六八七）→七味郡作山（元禄七年＝一六九四）→二方郡岸田村在所花口二軒（宝永四年＝一七〇七）と六十年間に八回の移転を但馬、因幡で移動を続けて晩年には二方郡に帰ってきている。移動を繰り返していた喜左衛門の一家では孫七兵衛は享保二十年（一七三五）には七味郡岡山野間ノ坪に住んでいたが、延享一年（一七四四）に播但山地を越えて播州宍粟郡奥谷村鹿伏まで移動転居している。

（次号に続く）

シルクロード紀行

～心のふるさと、はるかなシルクロード金谷鏡の源流を訪れて～

片山昭悟

一、はじめに

二〇〇四年八月二十八日から九月一日に中国の新疆（しんきょう）ウイグル自治区のウルムチとトルファンを訪れる機会に恵まれた。シルクロードの天山北路と天山南路のオアシス都市である。

私の目的は奈良時代の鏡紋様の源流を調査することであった。北京から四時間程でウルムチの空港に着いた。途中には聖なる山の天山、大黄河が飛行機から見える。シルクロードの天山である。万年雪の山々がそびえる。この地を訪れようと思ったのは、トルファンのアスターナが奈良時代の鏡に重要なところで、シルクロードを自分の目で見て、自分の足で歩いてみたい。自分の肌で感じてみたいと思っていた。長年行きたい、行ってみたいと思っていたところである。

二、はるかなシルクロード　ウルムチ・トルファン

トルファンは、オアシス都市、天山山脈の東端ボゴダ峰の南に位置している。古代から肥沃な土地であったことから豊饒な土地の名がある。想像が付かない熱砂や熱風が吹くトルファン。二重三重のポプラ並木。防熱、防風、防砂の役割があるとされる。そ

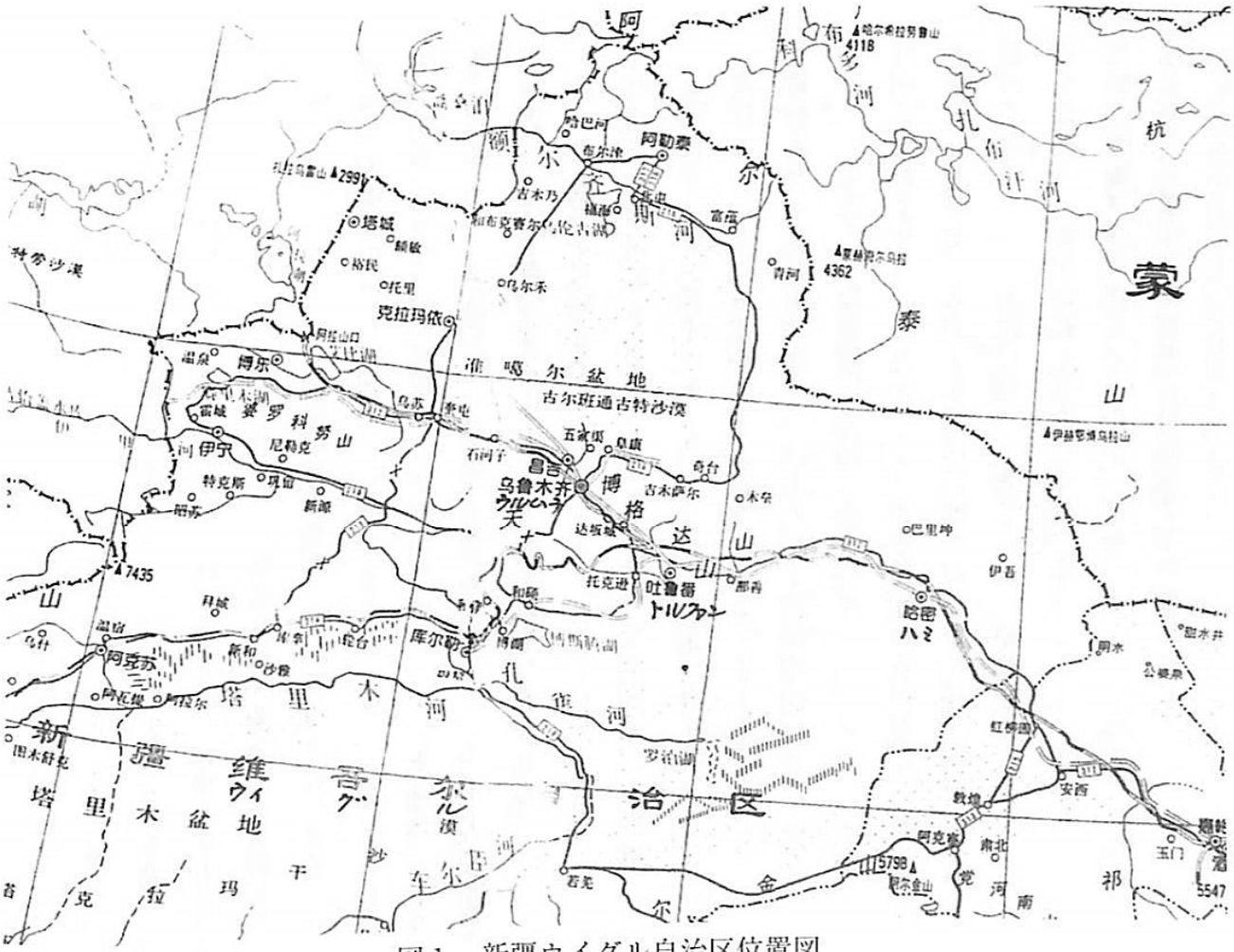


図１　新疆ウイグル自治区位置図

の下を天山山脈からの地下水路のカレーズがはしる。

トルファンの現地を訪れたのは、金谷鏡の紋様起源の調査をすることで、ウイグル族の歌舞、服装に描かれた紋様から金谷鏡の紋様の起源をみることである。

奈良時代の鏡紋様は中国唐から伝わったものである。その紋様はシルクロード、ペルシャが起点とされるものである。唐鏡の起源は、ササン朝ペルシャである。

金谷鏡の紋様は、内区は円鈕を挟んで双鸞が頸に綬帯をつける。上には山岳紋と朶雲紋、下方には小鳥が花枝にとまり口に果実を銜える。外区は花枝と飛雲を交互に配する。外縁は八花である。鏡背面の紋様は、シルクロードのトルファンを起源とする。中国から奈良時代に日本に伝来したものである。

図２　中国唐鏡拓本

三、シルクロード紀行

八月二十九日にトルファンを訪れてあこがれの聖なる天山をみる。

中国を訪れようと思ったのは、トルファンという新疆ウイグル自治区にあるオアシス都市を訪れることが第一であった。金谷鏡の紋様に描かれている源流ではないかと思ったことからでトルファンの現地をいつの日か訪れ、現地調査ができればと思ってトルファンを訪れた。

トルファンはシルクロードの天山南路の重要なオアシス都市である。海抜がマイナス一五〇メートルの低地である。八月二十八日にウルムチを訪れ、二十九日の午前九時三十分からトルファンの旅である。トルファンまで高速道路は一直線である。途中に聖なる山といわれる天山の山並みが見える。五〇〇〇メートルの頂上付近には純白の雪が降り積もっている。

写真１　天山遠景

トルファンからみる美しい姿の天山がもっとも印象的であった。ゴビ砂漠が広がる。天山の雪解け水が切り立った谷間を流れる。切り立った狭い谷の間を南疆鉄道が走る。コルラ、クチャ、カシュガルに続く。現代のシルクロードでもある。今トンネルをでた十六両の貨物列車がひた走る。まさにシルクロードに来たという実感である。付近には塩の湖もある。砂漠ははるか彼方まで続いている。

トルファンに近づく。トルファンは世界でも低地として知られ

る。ポプラ並木、葡萄棚、葡萄の集荷場、市場、葡萄の乾燥場が山裾に広がる。車窓からの眺めである。次第にトルファン市内に近づく。今北京時間の午前十一時である。約三時間かけてウルムチからトルファンの市内に入る。昼前にトルファン博物館を見学する。アスターナの地形、写真、唐代の人物像、獅子像、ミイラなどが展示されている。トルファン博物館から歩いてすぐの花団大飯店という新疆の地元料理で昼食をしていたら頭にターバンを巻いている人がいる。トルファンは多民族のオアシス都市である。トルファンはウルムチと少し異なるようである。午後にトルファンのバサールを訪れた。シシカバブという羊肉、葡萄やスイカ、ハミウリ、リンゴ、石榴の果物店、麺を打つ店、イスラム教の帽子店、ナンというパンの店がところ狭しと並んでいる。

絲綢之路（しるくうのみち）のトルファンは熱砂のオアシスで暑い。四十度を超す。火の州と呼ばれた灼熱の地を今訪れている。

写真２　火焔山

四、トルファンの情景

八月二十九日の午後に火焔山（かえんざん）とベゼクリク千仏洞を見学して、その後、アスターナの古墓群を見学した。アスターナの古墓群からは唐代の重要な資料が多く出土している。とくにトルファン博物館や新疆ウイグル自治区博物館に所蔵されている。トルファンのアスターナ古墓群出土は金谷鏡紋様の起源とされる絹織物の錦に描かれている双鳥、双羊と頸にリボンをつけているものが見られる。羊が頸にリボンをなびかせているものもある。

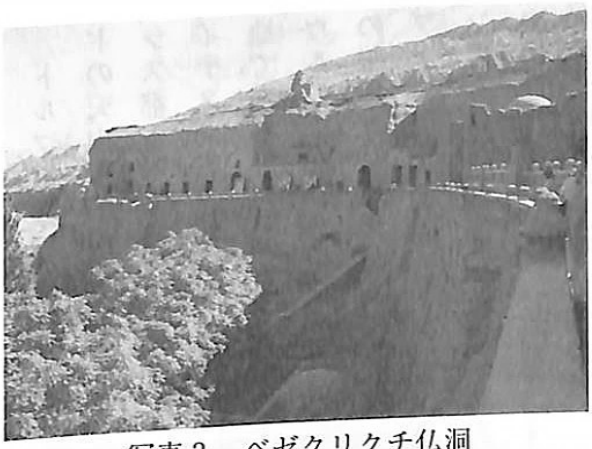


写真３　ベゼクリクチ仏洞

写真４　アスターナ古墓

今回、新疆ウイグルウイグル自治区の天山南路のオアシス都市のトルファンのアスターナ古墓を訪れたのは、アスターナという地を現地調査することが目的であった。そして、唐代の古墓はど

のような古墓であるかを現地調査により確認することからであった。長い参道と墓室があり見学した三基の古墳の二基には壁画が描かれている。一つは人物像、もう一つは花と鳥が描かれている。花は枝がすべて二つに分かれている。植物や鳥の絵が壁画に描かれていることからこの地に描かれた植物が見られないので埋葬された人は南方の人ではないかとされる。また、人物画から官吏の人ではないかとされる。

トルファンの地形は盆地である。市内はほぼ中心に位置する。北には天山の山並みがみえる。麓は火焔山の山並みである。火焔山のしわは断層でできたとされる。西には交河故城、火焔山の東にいたるとベゼクリク千仏洞がある。アスターナ古墓群の東には隋唐代の高昌国がある。

アスターナの地形は、古墓群に適した非常に周囲の地理的環境がよいものであると思われる。古墓群は唐代を中心とした西州の墓地群とされる。

トルファン市内の中心に位置する青年路の葡萄棚が美しくイスラム風ホテルの緑州賓館で、午後八時よりの夕食は新疆ウイグル料理で、午後八時といっても市内はまだ明るい、午後九時になり葡萄棚の下では、シルクロードのウイグル民族の華やかな民族衣装で歌と踊りである。ウイグルの人々は歌と踊りが好きであり、楽器は笛、太鼓、箏などで陽気である。踊りはマシュラップというウイグルで有名な踊りである。十時頃になり、その後、葡萄棚の下や近くのトルファン市内を散策した。

トルファンの現地を訪れ、やはり現地を訪れないと語れないと思う。中国の新疆ウイグル自治区は広いところでシルクロードは行ってみないと語れないことを実感した。私にとっては今日は貴重な一日であった。

五、ウルムチ情景

八月三十一日ウルムチの天池と新疆ウイグル自治区博物館を訪れた。ウルムチを訪れたときこの二つはいずれも唐鏡の研究でシルクロードでもっとも重要である。博物館ではトルファンのアスターナ古墓群から出土した絹織物、俑（よう）、ハミの一二〇〇年前のミイラなどが展示されている。天池は天山山脈の五四四五メートルのボゴダ山脈を望む海抜一九八〇メートルの高地にある伝説の湖である。天山は聖なる山で、ウルムチは天山北路の草原の街で、オアシスで、イリからカザフスタンへ通ずる。ここを作家の司馬遼太郎氏は訪れている。

ウルムチはモンゴル語で「美しい牧場」といわれる。天山北路の交通の要衝である。司馬遼太郎氏が訪れたとされるウルムチを、私は八月二十八日から三十一日に訪れた。ウ

写真5　ウルムチ

ルムチは大都市でビル、ホテルなど、人民広場には中国人民解放軍の石碑があり、広場には多くの市民が噴水をみたり音楽で踊ったり、早朝は太極拳をしている憩いのひろばである。

六、まとめにかえて

私は八月二十八日から九月一日にかけて中国唐鏡の調査で、シルクロードウルムチ・トルファンを訪れた。中国唐鏡の調査でシルクロードのトルファン・ウルムチで現地調査を行う。奈良時代の鏡に描かれた紋様の起源を探るというテーマで金谷鏡の紋様の源流でもある唐鏡に描かれている想像上の鳥の鸞が頸に綬帯をつけている。トルファンのアスターナ古墓出土の絹織物にはリボンをなびかせている紋様である。アスターナ古墓群から多量の絹織物や陶器、俑などが出土している。その出土品は、トルファン博物館、ウルムチの新疆ウイグル自治区博物館に展示されている。私は八月二十九日と三十一日にいずれも見学している。現地を訪れ調査を行った。金谷鏡に描かれている双鸞が描かれている。

また、今回の調査でシルクロードの聖なる天山を見る機会に恵まれた。中国唐鏡の紋様に描かれている山岳の紋様、飛雲紋、四本のすじ雲、朶雲紋（霊芝雲）がみられることが現地で確認できた。

天山の雪どけ水を地下水道で利用したカレーズのオアシス都市のトルファンは葡萄の産地である。市内の至る所に葡萄棚がある。葡萄は隋から唐代の海獣葡萄鏡にも描かれている。この鏡が飛鳥奈良時代に多く伝わったもので、葡萄は聖なる果実であり、葡萄へのあこがれがあったものと考えられる。

今回金谷鏡のルーツをもとめて奈良時代の銅鏡の紋様起源で重要な西域（シルクロード）を訪れ現地調査を行った。シルクロードの現地を訪れて自分の目でみて、肌で感じる貴重な体験をした旅であった。

室町末期の領主と年貢

下村哲三

久我家年貢納入（大永二年　一五二二）久我家は村上源氏中院家の一流、平安後期の源雅実に始まる五摂家に次ぐ七清華家のひとつ、現在京都市伏見区久我に別荘を営んでいたため、その名を称す。

文書は約三〇〇〇点にのぼり、その大部分は重要文化財である。内容はおおむね山城国久我荘をはじめとする家領荘園に関するもの県域の久我領荘園としては、播磨国石作荘（現宍粟郡山崎町）で源頼朝から池大納言平頼盛に安堵された平家没宮領の一部である。石作荘は頼盛の子光盛の嫡女である。

安嘉門院宣旨局ー五条局を経て、正応二年（一二八九）に久我通基に譲られたもの。旧河東の神谷以南が石作荘の領地になったのが寿永三年（一一八四）平安時代であり領主は久我家であった。

古い記録として残っているものとしては、大永年間（一五二一～一五二八年）で國学院大学図書館所蔵、久我家文書中の播磨国石造荘勘定定事（年貢記録）須賀村の名簿は六郎兵衛・左衛門二郎・九郎左衛門・七郎兵衛門・左衛門三郎・仏法寺・太郎左衛門・左衛門三郎・五郎次郎・茶屋五郎左衛門・下村牛徳丸・高所村は多田左渡守頼久・多田小槇丸・多田弥六。三郎左衛門・多田弥五郎・中村は弥次郎・式部・孫兵衛・七郎兵衛・三郎二郎・二郎三郎・助五郎・次郎四郎・三郎次郎・四郎兵衛・三郎兵衛・小山兵衛・長源寺・中村衛門・三谷村は助太郎兵衛・助兵衛・三郎大夫・向衛門・孫大夫・十郎左衛門・六郎兵衛・道徳・助郎大夫・六郎大夫・三郎衛門・次郎兵衛・七郎衛門・四郎大夫・禅枝庵・二二郎大夫・神谷村は次郎兵衛・二郎兵衛・三郎衛門・太郎衛門・四郎大夫・宝諸庵・紙屋左衛門・三郎衛門・次郎兵衛・五郎兵衛

以上の名簿の人達が記録に記載されている年貢数量と公事銭をどの様にして京都の久我家まで送ったのであろうか。先人たちのきびしく、しかも過酷な足おとが聞こえてきます。

現在は何処へ行くにも自家用車やタクシー、バス、レンタカーなどを利用して歩行者がほとんどなくなった。昔は土地を離れるといえば歩くより方法はなかった。

牛馬の背につけて古道（道巾一・二メートル）を利用して姫路

贈答品・記念品・名入タオル・ギフト全般
ギフトショップ
まどか
ロワール円
Personal Gift LOIRE
宍粟市山崎町中井１０５－１（ジャスコ南）
ＴＥＬ0790(62)8726
ＦＡＸ0790(62)9681
ご用命は通話無料のフリーダイヤルでどうぞ
0120 0120－338726

経由で行き、姫路からは山陽道で道巾は室町時代の経済の大動脈であるから道巾も廣く通交がやや良かったと思う。

又、もう一つの方法は出石から舟を利用して行くことであるが、元和二年（一六一六）から高瀬舟（三十石積み）の利用があったが、これより約一〇〇年昔であるから河川の整備（岩の突出）が出来てないから一〇石積の舟は利用可能であったと予想します。であるから竜野の正条まで舟で行き正条から陸路山陽道を利用で久我家の京都までと、それとも出石から網干港経由で難波（大阪）迄舟で行き陸路京都へと納入する。

以上納入の内で、はっきりわかっている名前は須賀村の下村牛徳丸、この人は出石の愛宕山頂に聖山城を築きたる城主下村新二郎貞康（長永城武士）の一族であろう。

又、高所村の多田佐渡守頼久（故人である多田嘉市氏の先祖で自宅の裏山に墓石有り）長永城の郷士待遇として家臣なり。

外に須賀村の仏法寺、中村の玉泉庵、長源寺、宝諸庵、三谷村の禅枝庵はどこにあったのかわからない。大永年間から降って慶長十三年（一六〇八）の寺名は須賀村願寿寺と中村には山伏仙光坊と梅正寺ありと町史は記載しています。

凡例

一、公事銭＝現物、夫役で納めるべき公事のかわりにおさめる銭

一、代しろ＝土地の面積単位、本来は稲一束を収穫する田積、のち高麗尺四方を一歩としその五倍を一代とした。

一、得とく＝検注帳などの記載で得田のこと、収穫のあった田。対は「損」（寸）

一、段たん＝土地の面積の単位。古代、中世には一段は（三六〇歩）、十段は一町

一、損そん＝「寸」とも書く。旱損、水旱など田

一、（作付）のあとに発生した損害と損亡

一、須賀カチカサワ＝カニガサワ

一、河谷＝神谷

一、橘＝立花

久我家文書　四季民大学四百年祭所蔵　大年四

播磨国石作荘年貢・段銭等算用状

長坪　四十代　分米五斗　公事銭八十文　中村　助五郎
同　壱段　分米七斗　公事銭百文　三谷　助大郎兵衛
同　壱段　分米七斗　公事銭百文　助兵衛
同　壱段　分米五斗　公事銭百文　同　三郎大夫
ナカヤシキ　壱段　分米七斗　公事銭百文　同　向衛門
メクハヤ　四十代　分米五斗　公事銭八十文　同　孫大夫
同　四十代　分米五斗　公事銭八十文　同　十郎左衛門
長坪　壱段　分米七斗　公事銭百文　三谷　六郎兵衛
カイチンヤキヤク　壱段卅代　分米壱石壱斗　公事銭百六十文　同　道徳
ナカヤシキ　壱段　分米五斗　公事銭百文　横村　次郎兵衛
同　壱段　分米七斗　公事銭百文　同　二郎兵衛
うら田　四十代　分米六斗　公事銭百文　同　三郎衛門
目鼻うら　壱段　分米五斗　公事銭百文　同　大郎衛門
四ツ子　四十代　分米五斗　公事銭八十文　神谷　北衛門
ハンシ　四十代　分米五斗　公事銭八十文　同　二郎大夫
ツヒノヘタ　壱段　分米七斗　公事銭百文　同　二郎衛門

メ[illegible]田　壱反　壱町給　参斗定　参田　小槻丸
トイノ本　給五代　欠斗八升五勺イ　ムラヤシキ　三郎左衛門
メ[illegible]田　廿五代　一円スチ田　参田　弥五郎
五反田　卅代　五斗六升イ　す欠斗九升　中村　善兵衛三郎
メ[illegible]田　卅代　五斗六升　す欠斗九升　中村ハノ田　次郎四郎
トノノ本　卅代　五斗六升　す欠斗九升　中村ヒヤノク　次郎三郎
五反田　壱反給代　壱斗八升七合　大ム　四郎兵衛
メクノ本　卅代　五斗六升　す欠斗九升　中村ヒヤノク　三郎兵衛
メクハヤ　壱反　壱町給　五斗飯升三合二勺　中村　小山兵衛
山田　壱反　欠斗　す壱斗　長願寺
ヲ田　四十代　四斗六升六合七勺　す欠斗三升三合三勺　中村　衛門
メ田　卅代　五斗六升　す欠斗九升　中村ヒヤノク　次郎
メクハヤ　壱反　内壱反畑レ　残田卅代五斗六升　中村　武郎
ヒヤ反　壱石欠斗イ　中村　孫兵衛
四田五代　八斗四升五合　す四斗三升　中村ヒヤノク　七郎兵衛
卅代　五斗六升　す欠斗九升　同谷　与三郎兵衛
トイノ田　卅代　五斗六升イ　同　同　四郎大夫

以上

（兵庫県史より）

山崎町須賀沢　長井家文書に見る
高瀬舟関係資料の読み出し（一）

森本一二

今を去る五年前の平成十二年五月二十日、宇原の志水美好先生に連れられて、はじめて須賀沢の長井家の門を入る。

このお家は、江戸期には、天領であった須賀村の庄屋をされており、明治になると、高瀬舟の船積みをする問屋をされていたのであるが、当時の門構えが今にしっかりと残る数少ない旧家である。

門内の広い庭を通って、これも古めかしい玄関の戸を開け案内を乞うと、かねてお願いし、訪問時刻も打ち合わせていたので、すぐに老婦人が迎えに出られ、座敷に案内してくださった。

（今はすでにこの老婦人は亡くなられ、淋しい事ですが、ご息女の政代様が伝来の古文書を大切に保管・整理されているので、度々お邪魔させていただき、いっしょに研究させてもらっています。）

広い書院造りの座敷であるが、中にシートを敷き、その上に大福帳などの帳面、文書などが山積みに準備されているのには本当にびっくりした。

私の今日の主な目的は、高瀬舟の記録を調べ、三年前に見た高所村文書に書き出されている、三十石舟の積み荷の裏付けを見出したかったことにある。

ところで、山積みの文書の中から手に取った大福帳は『船積勘定帳』とあり、中を開くと、日々の米の積み出しが、船主（船頭か）ごとに、積載量・送り主・送り先・川（船賃）・しき（蔵敷き賃）の順に書き出されている。

この中、明治十五年十一月三日よりの分を取り上げます

十一月三日・由松船で・米二十五俵・六角屋より・周蔵方へ
川、一円三十五銭一厘　しき、三十銭
七日・弥衛門舟で・米二十五俵・田村屋より・周蔵方へ
同日・治作舟で・米二十五俵　たね屋より・周蔵方へ
二十二日・由松船で・米三十俵　加藤屋方へ
二十三日・弥衛門舟で・米三十俵　加藤屋方へ
二十四日・伝蔵舟で・米二十四俵　佐介方へ
同日・直治郎舟で・米二十四俵　佐介方へ
同日・善五郎舟で・米二十五俵　佐介方へ
二十八日・喜平舟で・米二十一俵つるはしや上り・加藤屋へ
十二月五日・由松船で・米二十五俵　周蔵方へ

以下、別紙（1）のように加藤屋、周蔵方等の分が続いているが、省略する。

この勘定帳で、米の積み込みを見るのに、多くの場合は二十五俵前後のようだが、時には三十俵を積んだことが出ている。

米一俵は四斗あるので、二俵半で一石になり、二十五俵は十石、三十俵は十二石になる。

これらの事から、三十石積みの高瀬舟も米を積むときは、安全を期して三十俵（十二石）ばかりしか積まなかったようである。

高瀬舟の船積勘定帳

長井家にはたくさんの高瀬舟文書がありますが、其の中に船積勘定帳という日々の積み荷の記録をした、大福帳があります。

ここには、高瀬舟に関する色々な記録が残っているので、読み出してみましょう。

一、高瀬舟の川開き

高瀬舟は年中通っていたのではありません。夏になると、稲を作るため、大川をせき止めて水を水田に上げるのですが、其の期間は井堰がしっかりと塞かれているので、舟も筏も通れません。

その水揚げは昔から決まっており（川の上流と下流とで若干の前後があるとしても）中（ちゅう・夏至・六月二十一日頃）から、秋の彼岸（九月二十一日頃）までとなっていました。

ところが、秋の彼岸を過ぎますと、もう田に水は要らなくなります。そこで、この井堰の一カ所を切り開けて水を落とすのです。この切り口を『筏流し』といって、舟の通る道にもなるのです。

この事から見ると、彼岸が過ぎればすぐにでも舟が通れるよう

秋川
明治十八年酉十月九日
アホシ（網干）行
一金 弐拾参銭船床運上
一〃 参拾壱銭 乗賃
一〃 四拾銭 米代
一〃 三銭 川方
一〃 三銭 間
〆壱円
タツノ（龍野）行
一金 拾五銭 船床運上
一〃 弐拾銭 乗賃
一〃 参拾銭 米代
一〃 三銭 川
一〃 弐銭 間
〆七拾銭
弐拾銭 飾磨行
弐拾銭 松原行

に思えますが、そんなに簡単にはいきません。山崎の出石から、網干の浜までには沢山の井堰がありますが、其のうちの一つでも堰が切れていなければ、舟は通れません。

その井堰の切り口を調べるのは、誰の役でしょう。

また夏の台風などで川筋が荒れると誰が直すのでしょう。其れらのことを終えて初めて、川中一斉に船下りの開始となるのです。では、いつから通れるようになったのでしょうか。其の点について『舟積勘定帳』を見てみましょう。

川開きの前には、先ず『川秋・十月六日定メ』とか、『秋川・明治十八年酉十月九日』と書き出し、龍野や網干への運上金や、祝儀のようなものを出した記録を載せています。上記したのは明治十八年の記録で、十九年戌は十月五日に川秋、二十二年丑は十月六日などとなっていて、川秋（川開き）行事は秋分から十日余り経った十月の上旬になされています。この川秋行事がすんで初めて船が下り始めるのです。

二、高瀬舟の運航期間

次の表は、明治十七・申年始めと、十九・戌年始めの『荷物船積帳』によって、川秋日、初荷の日をあげたものである。

年	干支	川秋日	初荷	翌年	最終船
明治十七年	申	十月七日	十月七日	酉	六月十二日
十八年	酉	十月九日	十月十二日	戌	六月十二日
十九年	戌	十月五日	十月十二日	亥	六月十二日
二十年	亥	十月二日	十月二日	子	六月十一日
二十一年	子	十月二日	十月二日	丑	五月二十八日
二十二年	丑	十月六日	十月十八日	寅	六月十三日
二十四年	寅	（日付なし）	十月十六日	卯	六月十二日

更に、翌年田に水を上げる為に川を塞ぐので、船が通れなくなる。その川止めの日については、書いたものがないので、最終船の日をあげる。

この表を見て気のつくことは、川秋の日も、初荷の日も何日かのちがいがある事である。それは多分台風などがあって川の荒れた年や、川の痛みがなかった年によるのであろう。それに対し最終船の出た日は六月十二日前後でほとんど日が決まっている。これは井堰の日がきっちりと決められているので、それを見て船を止めるのであろう。

昔は農村どこでも麦を作っていた。

麦は百日の蒔き旬、三日の刈り旬といって、種薪きは十一月から、十二月の半ばになってもできるが、刈り取りは、はだか麦は六月に入って三日頃、小麦は六月の十日頃と決まっていたのである。そして、その作り方は、高い畝を作ってその上に種を蒔き、湿気は極端に嫌ったものである。更に麦刈りをして、これをこく時は、深い谷にむしろを敷き、その上に麦こき機をおいて、手でこきながら後によったのである。もしこの時、谷に水が入っていたりしたら、ムシロが濡れ、麦こきは出来ないのである。だから麦こきが済むまでは、絶対に水が田に入ってはならないのである。

では苗代水はどうしたのかと言うことになるが、勿論苗代踏みは八十八夜（五月二日頃）と決まっており、その田は常時水のしみ出る湿田とか、水口の低い深田などで平時流れる溝の水で養える田を選んでいたのである。

又、苗は五十日苗（大苗）を手植えしたので、中（夏至）が過ぎてから、田に植え込んだのである。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－7589

それで田に水を揚げるのは中（ちゅう）夏至六月二十二日頃よりと決まっており、井堰はその五日か一週間ばかり前にしていたのである。だから高瀬舟は六月の十二、三日頃までは通うことが出来たのである。

水切りは秋の彼岸頃と決まっており、それより遅れると十月十日頃からの稲刈りに、田が乾かなくて出来ないので、これもきっちりと井堰を明けたのである。

三、荷車輸送のはじまり

ところで、この『船積帳』をみているうちにおもしろいことに気が付いた。それは、荷車による輸送が出て来たことである。

その最初は、明治二十二年七月二十四日、『由松車』として、かた炭四十俵を中村屋へ運び、だちん七十銭と書かれていることである。この『車』という字は初めて出たものであり、この頃から車による運搬が始まったものと考えられる。

それに続き、七月二十八日、七月三十一日、八月二日、と続いて出ているが、高瀬舟の通わない七月、八月中に九車を出している。翌年の二十三年は『松山・六蔵車はじめ』として、七月二十九日にかた炭二十一俵・土田行き、だちん二十七銭三厘……からはじまって、十月一日までに五十七車も出している。これらの車は高瀬舟の通えない七・八・九月に限られているが、それは、積み荷の量によるものだろう。車では四十俵（四石）ほどしか積めない炭俵を、船では二百俵（四貫俵）で二十石も積めるのだか

ら、やはり船の方が有利であり、川が開くと車は出なくなっている。しかし、道が良くなり、牛・馬車が通えるようになると、安全で川水に関係のない陸上交通に変わっていくその先駆けがこの頃から出てきたのであろう。

（このように書いて一年あまりたったある日、元城原中学校長・西川博敏先生に、大正元年城下小学校において編集された、郷土誌を見せてもらった。その五九ページに、交通の項がおかれている。そこを読んで、荷車輸送の始まった訳がわかったので以下それについて述べたい。）

「此処城下村においては、明治二十年までは、東部を迂回する旧道を使っていたが、道幅も一間程しかなくようやく人力車・手引き車の通れる位の道しかなく、手入れも充分行き届かず、雨天などには通行が大変困難であったが、明治二十一年、揖保郡室津港より、龍野町を経て山崎に通ずる道が、城下村の中央を南北に一直線に、県道が開通してから、道幅も旧道の二倍余りになり、常に道路人夫を出して、その修繕を怠らず、この為大いに交通の便を増せり……。」とありました。

明治二十一年に、山崎から室津まで、広くてよく整備された県道が出来たので、前文のように荷車輸送がはじまったのだろう。最初の年は九車しか出ていないが、水量に関係なく軽便で安全な荷車の良さがわかって、翌年は船の通えない七月から、十月一日までの間に五十七車にも増えて来たのである。初めは小さくて、積み荷も少なかった車も、牛車・馬車になり、車も大きくなると、やがては船に取って代わる時の来るのも余り年月を要しなかったのではなかろうか。

四、季節と米の積み出し

高瀬舟の積み荷は季節によって変化がある。明治十八年を例にとって、米の積み出しを見てみよう。

この年の川秋は、十月九日で例年と比べて遅いが、それから年末までの積み荷を調べて見た。

まず十月から十一月の中旬までであるが、この間は農家にとって忙しい時期であるためか、僅かに五艘しか船がでていない。そしてその積み荷は専ら炭であって、その数も四百五十俵に過ぎない。しかし、十七日から米の積み出しが始まると、俄然船数が多くなり、一日に四艘も出している日がある。その米は十二月二十六日まで続き、十七艘の船が出て、三百八俵と四十六石を積み出している。

またもち米も一艘と、大豆は八船で八十三、五石と小豆一石を出している。これは新米が出ると、正月の高値・需要を見込んで急いで出荷するのだろう。また、この積み荷の集計から一艘の積載量がわかる。米三百八俵は百二十三石、それに四十六石を加えると百六十九石、これを十七艘の船で積み出しているのだから、一艘当たり十石を積んだことになる。大豆は炭や板材を積み合わせているときもあるので、十一石余りになる。

ところで気になるのは、米の量の表し方である。『俵』と『石』

の両方を使っているのはなぜだろう。それについては、上記の記録を見てほしい。

三十日　忠二郎舟
一、米弐拾五俵
川　壱円四十七銭
五厘
しき　三十銭
香山宇衛門

これは明治十七年十二月三十日の船積みであるが、香山の宇衛門船は米二十俵を積み、川一円十八銭、しき二十四銭と書かれているが、その俵数の下に小さく『四斗二升入』と書き込んでいる。次の由松船は米十石と『石』で量られていて、その横に小さく『五斗入』と書き込まれている。その理由は分からないが、同じ紙に石と俵の二つの表示がなされている。

一、米弐拾俵
四斗二升入
川　壱円十八銭
しき　二十四銭
由松舟

一石は十斗であるので、五斗俵では二俵で一石、四斗俵では二俵半で一石になるのである。それで、最初の忠二郎船を見ると、米二十五俵になっている。これは十石に当たる。これは由松船と同じ量を積んでいるので川銭を見ると、同額の、一円四十七銭五厘になっている。これで米俵には五斗俵と四斗俵があったことが確認できる。

一、米　拾　石　五斗入
川　壱円四十七銭
五厘
しき　三十銭

正月を過ぎると米の積み出しはほとんど目に付かなくなり炭俵の外に割り木が主力になってくる。しかし、絶無かというとそうではなくて、例えば、三月五日には米十二俵を、割り木五十束と積み合わせて出している。だがそれは少ない例である。

五、小口荷と雑荷送り

前記してきたのは、問屋から問屋へ送る荷の記録であって、一艘の船は、荷主は何人かあっても送り先は一軒の問屋（例えば加藤屋とか蟹江商店など）へ送られたものであるが、また一方では、小口の荷物を、個人から個人へ送るものだと思えるような積み荷もある。次に挙げたのは三月二十日、伊蔵さんの船の積み荷である。

二十日　伊蔵

一、かた（炭）九十一俵　横野栄蔵出　佐太衛門受
川　九十四銭五厘　しき十八銭二厘

一、米　五俵　本多直三郎出　勘次郎受
（川・しき・略）

一、米　一石四斗　藤井甚大夫出　伝七受
一、米　四斗　三木源左衛門受
一、かた（炭）十俵　小畑弁造出　和田多七受

このように米と炭を五口積んでいる。それぞれ送り主と、受取人が違うのである。合わせて炭が百一俵、米が三石八斗を一船にしている。

次々と見て行くと、目を引いたものがありました。それは、私

の村の元庄屋さんの栗山権兵衛さんが、娘さんの婚礼荷物の箪笥と長持ちを送っていられるのです。
それは次のように甚之助船で送っています。

甚之助（舟）

一、たんす弐本　　栗山権兵衛（出し）
一、長持ち壱本　　新宮かこや（方気付）
川十八銭　　正木（宛て名）
五銭　新宮　入用

明治十六年にこのように嫁入り荷物が、高瀬舟で出石の港を下っていったのですね。春、弥生三月に……このように、たくさんある大福帳を見て行くと、昔の人が言っていた修学旅行に高瀬舟で行ったという記録がでてくるかも知れませんし、花嫁姿で川を下っていった花嫁さんもあるでしょう。

ところで、この船の積荷の主体は、前の伊蔵船と同じく左太衛門さん行きの樫の割り木や、浅木の割り木が積み込まれて網干まで運ばれています。出石からの高瀬舟は、宍粟の産物だけでなく色々な物を積んで、宛て先によって所々の問屋に荷を下ろしながら通っていたことがよく分かります。（次号に続く）

農家の住宅と生活

谷井伴夫

昔の農家の生活を考えて見ると、何百年かの昔より我が塩山村は幾多の曲折を味わいながらも、先祖によって脈々と今日まで続いています。その間、時の権力者や支配者の変わる毎に様々な苦労や犠牲を克服してきた事でありましょう。

遠く平安京時代に「土万」の名が当時の国の統制者によって明らかになり、当時の柏野里や余部野里として我が郷土の前身が表れています。戦国時代より塩山は赤坂にお城があり、寺隣保には大福寺なるお寺があり、銀山には銅などを産出する鉱山があるなど、他自治会に比べて仲々豊かなる村であったのではないでしょうか。しかしながら、山あいの狭い土地も少ない農村であるが故に天災地変等には対応しがたく、おしめ祭りに示す如く苦しい時期を乗り越えて今日に至ったのでしょう。塩山はもともと山村ですので、少しの田畑や山によって生活を求めてきたのでしょう。

明治、大正、昭和と移り変わり、都市では文明開化と進んでも、私たちの所では田畑の五、六反もあり山林十町歩も持っていれば大したもので。大方は二、三反の小百姓で、しかも小作農家が多かったようです。それでも夏など田植えが終わると、朝草刈りに行き、朝食を食べ少し昼寝し、又、田の草取りや草刈りに行くなど、一日に四度も飯を食べておりました。（ただし大麦飯で

すが）二、三反の作りだったので男は山に炭焼きに行ったり、木こりをして稼ぎ、女は蚕を飼ったり他家の田の草取りを頼まれたり、炭焼きさんのダツ編み、筵打ち、縄ないなど何でも働いて朝星夜星で頑張ったのです。又、殆どの家は牛を飼い、鶏も十羽位おいて卵を取り、病人の見舞いに使ったり売ったりもしていました。木炭の生産は、宍粟郡の生産量の四割余りを土万地区で生産していたそうで、養蚕にしても村の半分近くは飼っていて、大きな農家収入でありました。

このような状態でしたので他町村などへの出稼ぎに行くのは、炭焼きさんが但馬方面や岡山の津山方面へ行くくらいで、又、秋から春にかけて林田や龍野の素麺屋に行くくらいと、大工さんが外の村へ時期的に行かれたようです。月給で暮らしている人は先生か役場勤めの人で、それ程多くの人はいなかった。

当時昭和までは男女とも着物が殆どで、下着など男はバッチにフンドシとジバンで、女はジバンに腰巻きで蚊やブトにさされてもなれているので平気で仕事をしていた。

田んぼなど今のように整備されてなく深田が多くあり、スネの上までに泥につかりながら三ツゴで耕したりしていたのです。

「補植して歩くごと波立つ深田かな」

昔の風景画は女性の田植え姿で、カスリの着物に赤い腰巻きの花がそこかしこに咲いた時代もありました。履物はゾウリで雨降りや雪降りの時は下駄でした。

「抱えたる笠に田植えの汚れもの」今と違って昔は全身泥まみれになって田植えをしたので、毎晩着ているものを女性がすげ笠にいれて洗濯した様子をうたっています。

私が小学校に入学した当時は、着物姿で服を着ている子供はいませんでした。昭和六年で十年頃より服になりゴム靴になりましたが、夏は草履（ぞうり）でしたし、運動会で歩く時などはゾウリか裸足でした。川で泳ぐのも誰も裸で前をかくしたりはしなかったのです。子供も小さい時より家事の手伝いをよく致しました。兄弟（姉妹）が多かったので子守もするし、学校へ弟や妹をつれて来る子もまれにありました。学校から帰るとすぐ宿題をして、台所で使う水を汲んだり、風呂水も小さい体で大きいたごを荷なって汲んだものです。今の様に水道でないので、井戸よりバケツや桶の小さいのを竹の先にくくりつけたもので汲み上げたのです。それが終わると親がよいと言えば遊んだ。田植時になると、近所隣と助けたり手伝いに来てもらったりで、ワサ植やサノボリにはまぜ飯をして近所に持って行くのも、昔よりのよき習慣であったように思えます。

呉服とジュエリー
とくさや
本店　本町（さつき通り）62-1680
咲ランド３Ｆ呉服のとくさや　63-0568
〃　２Ｆジュエリーとくさや　63-0557

「サナブリや大ヘッツイに煮ゆるもの」
農休みは区長（今は自治会長）さんより触れがだされて、村全体が各戸では柏餅など作りゆっくり休み、農繁期に入ると託児所が開設されるお宮や倶楽部（公民館）で先生が子供を預かり、遊戯や宝探し、川遊びなどして農家に協力したのです。

農家の住居、食生活について

戦前の農家は殆どが木造茅葺きで僅かに瓦葺きか杉皮屋根でした。藁屋根にはカラスおどしがあり軒ヒサシには瓦や杉皮を使用していました。屋内の構造は建坪の三分の一程が土間で、床の上がった居間、炊事場（台所）について述べますと、まず二帖程の炊事場で粗末な流し台やヘッツイ（かまど）が二つ三つ並んでいました。茶の間にイロリがあってイロリを囲んで上座、横座、下座と奥さん方の座る場に分かれていたようで、女性の座る側に水屋兼戸棚があり必要な物が納めてありました。イロリには自在鍵がかけてあり、茶葉も毎日取り替える事もなく、袋に入れて渋い程よくでたお茶を飲んだものでした。イロリの近くには柴が置いてあったし、五徳があり上に鍋などがあり、下にモエサリをかき込んで保温用等に使ったり、網を置いて餅をやいたりしました。茶の間は四帖半か六帖位で、家族の食事や団らんの大事な場であり、当時は一戸に一個の四十ワット位の電球でした。その昔はカンテラでその以前は油にトウ芯を使ったのです。塩山に電気がついたのは昭和初期です。

納戸は三帖から大きい家で六帖で、電気もなく窓もない暗い建て付けの悪い板戸か障子で子供を産み育てたものです。中納戸（なかなんど）のある家はそう多くはなかったです。

表側（入り口）は、土間の方が板場になっており、次が六帖又は八帖が普通で、何かある時以外は板の間か、ござ敷きならましな方で荒むしろでした。

又、蚕を飼う家は真ん中に炉が掘ってあり、木炭や練炭で温度調節をして蚕を飼っていました。戦時中以降には、サツマ芋を保管するのによく利用していました。

奥の間（客の間）として使用し、床には神棚や仏様がお祀りしてありました。六帖から十帖で、畳は取り上げて上敷やゴザ位で質素なる生活をしておりました。床のない土間の方は、入り口に大きい大戸（司戸）があり、入った所にカラス（米や麦を足で精米する）があり、奥庭には大きい水ガメやカマド（ヘッツイ）や水屋がありました。そして裏側へ出る開き戸が必ずありました。又、

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL62 0036

漬け物樽が沢山あって、味噌やモロミしょう油、たくあん漬けなど、何もかも自家製品を造って使用したのです。土間ですので梅雨時や長雨の折は庭がぬるぬるになり転びそうになりました。土間の片隅に四帖半か六帖位の牛舎があり、夏には蝿や蚊がブンブンと沢山わき、衛生面でもすごく悪かったけれど、家族同様に大切に養ったのです。

大戸の反対側には、大体の家は風呂場になっていて、小用の便所も一緒にあり、その下はダルになっていて風呂の流し場や小便が落ちるようになっておりました。

風呂も毎晩焚かずに近所と交代に焚いて借りたり貸したりしました。風呂に入るのに表の間か縁ゲで裸になるので、入って居る所へお客でも表にこられると出る事もできず困る事もあったようです。風呂も五衛門風呂で、下す板を上手に踏み込まないと釜に直接足が付くのでやけどすることもあったのです。昔話の東海道五十三弥次喜多が、下駄を履いて風呂に入ったとの話がある位ですので、昔は百姓は八月大名だなどと言ったものですが、なかなか休んではいなかったようで、女の人は布団洗いをしたり着物をほどいて洗いシンシ針で乾かしたり、朝夕は牛の草刈りや田の草取りも一番草、二番草など多忙の毎日でした。

男も同じように草刈りや田返しや、八月の暑い最中にマヤ肥を内肥として稲の株間にいれたのです。又、草を沢山刈ってきて牛に踏ませて、庭先で山のように一つか二つ位高く積んで田の肥にしたのです。

今のように化学肥料はなく硫安、過リン酸石灰、加里の単肥で高くつくので下肥（大小便）やマヤ肥で本当の有機肥料を利用したのです。田植えなどの準備も牛で耕して、手で植えて何もかも手仕事でした。

今のように機械化したのは昭和三十年以降ですから、「どっかりと納屋を占め居り田植機を一日使いて田植え終わりぬ」今日の姿、食べる物も大変まずい物で殆ど自家でまかなっており、盆正月に買って食べる位で、いつもは米三分か四分に六分の麦飯だった。その麦もカラスか水車で踏んで、前日よりヨバして米と一緒に炊いたのです。

弁当の必要な子供や大人には、その中で米の多い所を入れて、家に残る者は麦ばかりのご飯を食べておりました。

小学校の遠足や山登りには、ニギリ飯に梅干し入りを新聞紙などに包んで持って行ったり、秋になるとさつま芋を弁当代わりに、冬は餅を持っていくのが楽しみでした。

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

本当に昔ばなしの様で、今の時代ではおかしいし想像ができないでしょう。

夏になり夕方になると蛍が沢山とんでいたり、川には多くの小魚がいました。今では魚の種類も少なくなりました。晩方になるとソコカシコでトバセで魚をとる人や、早釣りでウナギをとる人が大勢おられたのに、今はそんな姿は見かけなくなって淋しい限りです。はやく昔の様な姿になってほしいです。

夏の風物詩は何といっても蛍狩り、

「蛍二十日に蝉三日」

ゆかた姿にウチワを持って子供を連れての蛍狩り、思い出しても楽しいですネ。

（注）ダルとは風呂場の排水と小便所を兼ねて、大きい桶などを埋めて流し水や小便が溜まる所です。

『山崎町歴史街道』（九）

●山崎町の史跡巡りをしませんか●

会　報　部

三十六　春日神社（山崎町高所）

春日神社はＪＡ兵庫西河東支所前を北へ約百メートルの所に江戸時代の代官屋敷跡（現在関西電力山崎寮）がありますが、その北側の谷川に沿って上流へ五十メートルほど進むと左側にあります。

この神社は、大江山の鬼退治の伝説で知られる源頼光十数代の末裔　従五位　多田佐渡守源政豊が天正の乱において敗退し、この地に逃れました。当地の豪族宇野氏の情けでここに館を構えて守神　春日明神を祀りました。しかし天正八年（一五八〇）長水城落城のとき、この地も秀吉に攻められて館は焼失しましたが、嫡子政清は許されて僧となり多田院を建てました。

文禄元年（一五九二）村人と共に奈良の春日神社より再び御神霊を受けて春日神社を造営し、それより後、当村の氏神として今日に至っています。

ここの神社の特徴として、狛犬が鹿の像になっています。

春日神社

三十七　矢原神社の大スギ

山崎町指定天然記念物（山崎町矢原七三番地）

河東小学校の道を北へ約百メートル進むと、矢原地区の山麓に神社の鳥居が見えます。その鳥居をくぐって、幅二メートル程の坂道を五〇メートルほど登ると高い石垣の上に玉垣に囲まれた社殿があり、その前に神社の御神木である大きな杉の木が聳えています。

この杉の木は山崎町の天然記念物に指定されている巨木で、郡

内においても第一級の巨木です。根回り六・三〇メートル、幹回り四・六三メートル、樹高約四〇メートル、推定樹齢約五百年、長い年月風雪を凌いできた風格があります。

町内には、森林王国にふさわしく巨木が数多くありますが、その中で杉の巨木は、兵庫県の指定は二本、町指定が三本の計五本が特に大きく、天然記念物に指定されています。矢原神社の大スギはその中の一本です。

矢原神社の大スギ

三十八　生野義士最後の地、美国神社と墓碑

（山崎町木ノ谷一五三番地）

国道二十九号線の井ヶ瀬橋（田井ー杉ケ瀬間）を渡って約一キロメートル北上した所、東側山麓に美国神社があります。

この神社は、幕末のころ、尊王倒幕運動に参加し、文久三年に起きた生野事変に参加し、失敗して逃走途中、この地で亡くなった美玉三平、中島太郎兵衛、その弟黒田与一郎（後　獄中死）の三士の御霊が祀ってある神社です。

幕末のころ、黒船来航、安政の大獄、桜田門外の変、池田屋事件等々、世の中は騒然となり、尊王攘夷、倒幕運動へと幕府に対抗する勢力が起きて来ました。そのような時期、文久三年（一八六三）十月十二日、尊王攘夷派の志士・筑前藩士平野次郎、薩摩藩士美玉三平等が、先に長州へ都落ちした七卿の一人公卿沢宣嘉を奉じて生野代官所を襲撃しましたが結局失敗し、四散して逃走し、途中で捕らわれる者、自殺等で命を落とす者がありました。

美玉三平と和田山高田の大庄屋中島太郎兵衛、その弟黒田弥一郎らは、十月十四日の払暁生野を出て神子畑から黒原へ入り福野、西深、深河谷、安積を通って南下するうち追っ手の農民に撃たれ、美玉三平は木ノ谷の山神社の大木の下で倒れ亡くなりました。重傷の中島太郎兵衛は、村年寄　善蔵方で弟弥一郎の介錯で切腹して亡くなり、弟弥一郎は捕らえられ、後、京都六角の獄舎で病死しました。

明治二十一年になって郡内有志により、美玉・黒田両氏の墓碑建設の基金募集があり、明治二十四年墓碑が完成しました。

また、その後、美玉三平、中島太郎兵衛、黒田弥一郎、三士の御霊を祀る美国神社が村人たちによっ

美国神社

生野義挙石碑

て創建され、現在の新社殿は昭和五十八年四月に改築されています。

事務局だより

山崎町も五十年の歴史に終わりを向かえ、本年四月一日から新生「宍粟市」として発足しました。

よりよい街づくりのために、市民こぞって頑張りましょう。郷土研究会も昨年は、前会長や顧問の壷阪氏を見送り。又、社会的には台風など災害の多い年で、大変な一年でありました。

本会の平成十七年度総会も去る三月六日午後一時三十分より防災センター四階研修室に於いて、町長、教育長、荒木文化協会会長を、来賓に迎えて開催しました。

十六年度事業・会計決算の承認と十七年度の計画・予算を決定し、役員の改選を行いました。役員については、別項に記載しております。総会の出席者は三十四名でした。

記念講演は「中世の山崎」と題して、夢前高校校長　岩井　忠彦先生に話していただきました。

名誉会長や顧問について、五月の市長選挙で変更が出るかもしれませんが、そのときどきの情勢で事務局で対処いたします。

永い間研修部長・河東支部長として、旅行等にお世話になりました、織金達雄氏が残念なことに退会されました。河東支部長は衣笠弘一郎さんにお願いしております。研修部長は少しの間事務局長が兼務しますのでよろしくお願いします。

『播磨の光芒＝古代中世史論集Ⅰ＝』発行される

山崎郷土会報にも投稿してくださる県立夢前高校校長の岩井忠彦先生がこのほど『播磨の光芒＝古代中世史論集Ⅰ＝』を発行されました。

A4版三一三ページに及ぶ播磨の古代から中世の研究書です。岩井先生は高校時代に伊和神社に参拝されたときに「大和政権の播磨進出と伊和氏」という研究テーマが頭に浮かび、温め続けて来られました。宍粟郡について高家庄と宇野氏、都多村についても資料を基に紹介されています。非売品ですが、図書館に寄贈されていますので是非ごらんください。

きれいなカラープリントの店

コーエーカメラ Specialty Camera Shop

本店　宍粟市山崎町東鹿沢 26-3　☎62－2089
フリーダイヤル　☎0120－440－990
ＦＡＸ 0790－62－7429
咲ランド店　ＴＥＬ 0790－63－0533

平成十七・十八年度役員

役職名	氏名	住所	電話
名誉会長	高嶋　利憲		
顧問	大西　耕雲		
顧問	荒木　俊介		
会長	森本　一二		
副会長	柳田　弘		
会報部長	大谷　司郎		
研修部長	春名　俊夫		
史跡部長	志水　正信		
事務局長	春名　俊夫		
山崎地区西支部長	木山　延二		
山崎地区東支部長	福井　卓巳		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	三宅　保雄		
戸原地区支部長	金山　敞史		
河東地区支部長	衣笠弘一郎		
神野地区支部長	春名　俊夫		
蔦沢地区支部長	福本　亀男		
菅野地区支部長	河本　雅視		
土万地区支部長	赤松　茂毅		
監事	河本　雅視		
監事	三宅　保雄		

平成十七・十八年度　各部構成

会報部長
大谷司郎

谷川　ヒデ
藤村　清一
河本　雅視
浅田　耕三
片山　昭悟
木山　延二

研修部長
春名俊夫

垣口ちゑ子
金山　敞史
宗平　圭司
秋久　邦夫

史跡部長
志水正信

伊野　操治
山根　一視
伊藤　一郎
柳田　弘